

あるむぜお105

府中市郷土の森博物館だより

a/museo NO. 105

2013年9月20日



多摩川のオギ 写真提供：府中市役所広報課

目次

- 1-2 多摩川と府中
 - ②河原のオギは府中の絶景
- 3 展示会案内
 - 企画展 **カモの常識**
- 4-5 ノート 古代国府に薬園はあったか？
～国府のマチの景観を探る～
- 6 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物
 - ⑩依田伊織
- 7 最近の発掘調査
 - 布堀り基礎の掘立柱建物跡
- 8 連載 天文・宇宙の最新動向
 - ②いよいよ動き出した次世代大型望遠鏡 TMT 計画

多摩川と府中

府中に暮らす人々は、昔から多摩川と深い関わりを持ち、多摩川をとおして、いろいろな動植物とつながってきました。多摩川と府中の織りなす諸相を4回シリーズで紹介します。

②河原のオギは府中の絶景

多摩川中流域の河原に広がる銀色のじゅうたん。河原の秋を代表する情景は、オギの群落です。オギはススキによく似ているので、この風景をススキの原と勘違いする人もいます。河原にはススキよりオギ……どうしてでしょう？

多摩川と府中

②河原のオギは府中の絶景

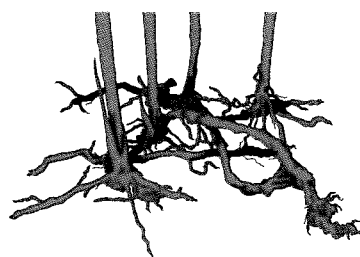
1984年（昭和59）の市制施行30周年を契機に、ふるさと府中の自然景観や風物詩の中から、市民応募による府中30景が選ばれました。馬場大門けやき並木や浅間山のムサシノキスゲなど、代表的な府中の自然がもれなく含まれています。中でも多摩川に関わるものは3項目あり、「つり人に夕陽がのびる晩秋の多摩川」「是政河原のオギ群落」「水鳥の群がる冬の多摩川」と、どれも市民の自慢の情景です。府中に暮らす人たちの多摩川に自然の豊かさを求める思いが、30景に複数の項目を選定させたのかも知れません。夏が過ぎ、季節は秋へと移りますが、これからの多摩川でオススメの景観は河原のオギ群落です。

河原一面に広がる銀色の穂が、陽を浴びてキラキラ輝いて見える多摩川の絶景。「いやあ、河原のススキが見事だね」などと会話がはずんでいるようですが、実はこれススキではなくオギの群落なのです。河原には似たようなイネ科の植物が3種類ほど生育しています。もちろんひとつはススキ、そして間違いやすいオギとヨシがそれです。ヨシはどちらかと言うと下流や河口域の川岸（水際）に生えます。草丈の長い植物が固まって生えているわけですから、魚や鳥にとっては非常に有難い隠れ家です。一方、オギとススキは外観だけでは判断しにくいほどよく似ています。両者とも同じススキ属なので無理ありません。但し、多摩川中流である府中の河原では、オギが一番の生育範囲を誇っているようです。

オギとススキの決定的違いは、根の部分にあります。ススキはひとつの株から数本の草を伸ばしますが、オギは地下茎を伸ばして広がっていくのです。そしてススキは乾燥した山野や路傍に生え、オギは湿った土の河原を好みます。つまりススキとヨシの生育場所の中間的条件がオギの適所になるわけです。

根茎が良く発達しているオギは、10cm程度の茎間隔で密に連続して地下茎を伸ばしていきます。河原の土壌は上層が砂で、下層はシルトを含んで

いることが多く、川が増水した場合は、すぐに流されて様相を変えてしまいます。ですがオギが生育している河原では、下層が薄くても上層の砂層内でマット状に根茎が張りめぐらされ、土壌の保持に役立っていることとなります。地下茎の間隔が空いているので、洪水になってもまともに水を受けるとなく、倒伏も防げるのです。仮に倒れたところで、節から新たな地上茎を発達させて回復することができます。増水時には砂やシルトなどが群落内に堆積するので、倒れた茎から新芽を出すことができる環境でもあるということです。これが株立ちのススキであれば、水の直撃をまともに受けて、ダメージは免れないでしょう。



オギの根



ススキの根

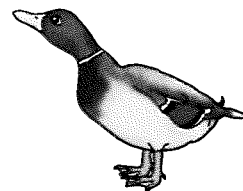
多摩川では、1974年・79年に1回ずつ、82年に2回の大洪水がありました。実は、これらが発生する前の73年までは、河原の高水敷（水路より一段高いところ）にはススキの群落があったのです。しかし、翌74年の洪水がススキを倒し、河岸を浸食しました。以後数回の洪水を経て、河原には代わってオギの群落が広がりました。府中30景が決まった1984年には、タイミング良く多摩川の河原には、すっかりオギ群落が定着していたというわけです。多摩川の河原にとっては秋の代表的景観であると同時に、洪水から河原の浸食を防ぐための守りとしても、適当な植物と言えるようです。多摩川にとっても、市民にとっても、オギの群落は大変意味のある自然環境なのです。

（中村武史）

企画展

カモの常識

2013/9/21 (土) ~ 2014/3/9 (日)

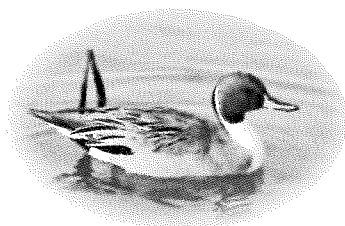


会場：本館2階企画展示室

観覧無料

前ページでも紹介しましたが、府中30景の内、「是政のオギ」以外で多摩川に関連する項目の中に、「水鳥の群がる冬の多摩川」があります。オギ同様、これも市民の中では絶景と認識されているのでしょうか。それほど多摩川には多くの水鳥がやって来るわけですが、水鳥とは何を指すのでしょうか？ その名の通り、多摩川の水面や水中を生活のテリトリーとした鳥のことです。グループとしてはガンやカモの仲間になります。

一年中日本にいるカモは1種類しかいません。小さな子ガモを引き連れて、皇居のお堀端を行進する光景が有名なカルガモがそれです。では、冬の多摩川に群がるカモはどこから来るのでしょうか？



オナガガモ

ガン・カモ類は、淡水ガモ・海ガモ・ガン・ハクチョウな

どを含み、ほぼ世界中に分布します。その数はおよそ150種と言われ、うち日本に来るのはその約1/3に相当する種類です。上野の不忍池や新潟の瓢湖と言った、有名飛来地もいくつかありますが、多摩川ではやって来る淡水ガモの数が大変豊富です。そしてこれは冬季に限った光景なのです。冬場にしか見られないと言うことは、春から夏のカモはどこにいるのでしょうか？ 実は日本より遥か北方のシベリア東北部、寒帯から亜寒帯にかけての地域で繁殖活動を行っているのです。ところが、冬になると繁殖地は、雪と氷に閉ざされた極寒の

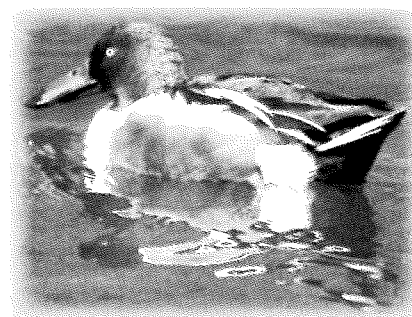
環境と化してしまいます。そこで彼らは、鳥特有の翼を使って長距離を南下してくるわけです。温暖な気候の日本は、適当な越冬地として選ばれた場所なのです。

冬の多摩川・・・河原から眺める水面・水辺に、何種類も交じって群れるカモの姿は、これまたオギ同様に、多摩川の一大風景として目に映ります。

さて、越冬のために日本にやって来るという行動は、今説明した通りですが、水面を泳ぐ時も、休憩している時も、群れているのはどうしてでしょうか？ みんな何をエサにしているのでしょうか？ 同じものを食べるのでしょうか？ 日本には単に寒さを凌ぐだけの旅なののでしょうか？ じっくりと観察すればするほど、様々な疑問が湧いてきます。どれもカモにとっては、生活していく上で当たり前のことばかりですが、意外と私たちには知られていないことが多いような気がします。そんなカモへの疑問について、展示を見ながら一緒に考えてみませんか？ 何気ない羽の色や嘴の形でさえ、それぞれに理由のあることが発見できるはずですよ。

冬の多摩川に飛んでくるのはカモの常識！でもその数が減っているとしたら、それは人間の非常識が多摩川に及んでいることが原因かも知れませんね。

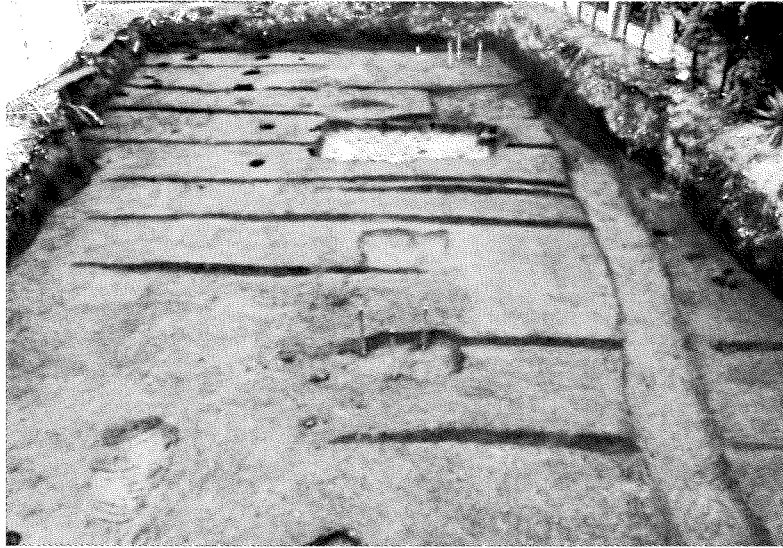
(中村武史)



ハシビロガモ

古代国府に薬園はあったか？ ～国府のマチの景観を探る～

深澤 靖幸



宮西町3丁目の発掘区の全景

細長い溝が並列していて、畝の畝と考えられている。中央にある四角い穴は9世紀後半の竪穴建物跡で、畝を壊して作られている。畝は9世紀後半以前のものと判断できる。

▼はじめに

博物館の顔ともいえる常設展示室のリニューアル工事が今年度末から始まる。このリニューアルでは、古代武蔵国府を扱うコーナーを、これまでの発掘調査成果をもとに大幅拡充することになっている。発掘資料とともに、その目玉となるのが、古代国府のマチの模型である。

国府跡の発掘は各地で行われているが、中心となる役所（国衙）跡のみならず、それをとりまくマチを発掘の対象にしている所は、意外と少ない。府中市が主導してきた発掘調査は、広い範囲を対象に悉皆的に行ってきた点に大きな特長があり、古代国府の広がりや空間構造に関する情報を豊富に蓄えている。

かい摘まんでいえば、官庁街である国衙には壮大な建物が建ち並び、その隣には寺院もある。そこを中心に多くの人びとが集住したマチが形成されており、都から赴任してきた国司たちの居宅や、マチの所々には国衙に納まりきらなかった役所の分庁舎、武蔵国内各郡の郡役所の出張所などもあり、これら主要施設が道路で結ばれる。そんな姿が復元できる。

ただ、模型を製作するとなると、復元すべきものの、つまり考証すべきものは多岐にわたる。古代の人びとの営みの痕跡全てが遺跡として残っている訳ではないから、状況証拠を積み重ね、想像を交えなければならない事柄も少なくない。マチのなかに木々は生えていたのか、街路樹はあったか、湧水はどこにあり、小川はどう流れていたか、マチの周辺の景観は……。

▼発掘された畝

そんな多くの考証すべき課題の一つが、畝の存在である。マチのなかに畝はあったのか？ 国府のマチは人の流入が激しく、ここで生まれ、一生を終える人は僅かしかいなかったと考えている。つまり、個人の宅地が継承されるような場所ではない。生産の場である畝も同様だと思う。

ところが、小さな溝が並列する、畝の畝らしき遺構が複数の地点で発掘されている。出土品にも鍬や鋤の刃先、鎌の刃、穂積み具など農具があるから、国府のマチに住む人びとも農作業にいそんでいたことになる。一時的な滞在者にすぎない国府のマチの住人も、住まいの近くに小さな畝を営み、新鮮な野菜を消費していたのだろうか。

興味深いことに、^{みやにしちよう}宮西町3丁目では、隣接した地点で畝のような遺構が見つかっている。その範囲は東西40m、南北50mに及んでいて、宅地内の畝にしてはだいぶ広い。

この畝の土の中からは僅かながらも稲のプラント・オパールが検出されている。プラント・オパールとは、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸^{けいさん}が蓄積したもので、植物が枯れた後も^{びか}微化石^{せいせき}となって土壤中に半永久的に残る。その検出は、^{あかほ}陸稲栽培^{りくねい}が行われたことを示しているのかもしれないが、後世のプラント・オパールが混入した可能性も残る。何が栽培されていたかは即断できないといえよう。

この点はしばらく^あ措くとして、付近で見つかっている^{たてあな}竪穴建物^{たてあな}の年代を調べると、9世紀半ば以降のものばかりで、9世紀後半の竪穴建物が畝のような溝を壊して造られていることもわかる。つまり、国府のマチが誕生した7世紀末以降、9世紀前半ころまで、この場所には竪穴建物が作られることはなく、畝が営まれていた可能性が高いのである。

▼管理主体は国府か？

国府のマチのなかで、長い間継続して営まれた畝はどんなものなのだろう。

結論をいえば、それは国府が管理する畝だったのではないか。国府をはじめ古代の役所は、役人たちに給食を提供した。その際、食料の多くは武蔵国内各地から運び込まれたと考えられるが、国府自らが生産していても不思議はない。

ただ、国府管理の畝の存在を実証するには、畝を囲む溝^{さく}や柵、管理棟の役割を果たすような掘立柱建物跡といった施設が必要となる。現時点では、そうした施設は見つかっていないから、想像の域を出ないことはもちろんである。

▼薬園はあったか？

そのうえで、さらに想像をたくましくすれば、薬草を栽培した薬園の存在が浮かぶ。

古代の法典の施行細則を集大成した『延喜式』によると、武蔵国は^{しやくやく}芍薬^{だいおう}や大黃など実に28種もの薬を中央政府に納めることが規定されている。そのほとんどは草の根や根茎、実を乾燥したり煎じたもので、今も漢方薬として利用されている。

奈良県にある^{ふじわらきよう}藤原京跡^{ふじわらきよう}では、実際に、武蔵国から^{ちん}貢納^{こう}された薬に付けられた荷札、いわゆる木

藤原京跡出土荷札(複製)

「无耶志」は武蔵の古い表記。都には、典薬寮という薬物や薬園を管理し、役人の医療にあたった部署があった。この木簡の出土地点では、ほかにも薬の荷札が見つかっていて、付近に典薬寮があったものと推定されている。



簡^{かん}が出土している。「^む无^し耶^し志^し国^し薬^し桔^し梗^し州^し斤^し」^む「无^し耶^し志^し国^し薬^し烏^し」の文字を記した2点である。桔梗^{ききやう}は、その根に^せ絞^せを切り、^せ咳^せを止める効用があり、烏^うは^う烏頭^{うづ}つまり毒性があることでよく知られているトリカブトの根のことで、鎮痛剤などとしても用いられる。荷札そのものは7世紀末ころのもので、国名以下の郡名などを記さない点に注目するなら、荷札は国府で作成されたと考えてよい。

そうであるならば、薬草の栽培や製薬そのものが国府の管理下で行われていた可能性が浮かんでくる。むしろ、薬草の種類によって生育環境は異なり、例えば、トリカブトは沢筋などの比較的湿気の多い場所を好む。したがって、全ての薬草を1か所で栽培したとは考えにくいし、国府がマチの外にも薬園を保有したり、^{こうえき}交易^{こうえき}によって薬草を入手することも想定できる。しかしそれでも、薬園の可能性は捨てきれない。国府のマチの模型には、薬園を復元してみたいと思っている。

今回取りあげた畝と薬園はほんの一例にすぎない。発掘された事実を基にしつつも、相応の考証と想像を交えることで、マチの景観は豊かになる。国府のマチを舞台とした人びとの営みに考えをめぐらすことができる模型、それが理想である。リニューアルオープンは、来年10月の予定である。どこまで理想に近づけるか、まだまだ、考証と想像を繰り返す必要があるようだ。

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物

⑩ 依田伊織

JR府中本町駅から北に向かって少し歩くと、天台宗善明寺（本町1丁目）があります。このお寺にある「鉄造阿彌陀如来坐像」は国指定文化財に、西園寺実満の墓と依田伊織の墓は東京都の旧跡に指定されています。西園寺実満は、勤皇の志士として生野の変などで活躍した人物で、晩年を善明寺で過ごしました。一方、依田伊織は、上野国沼田（現 群馬県沼田市）の黒田直邦などの大名をはじめとし、400人以上の門弟をもつ宗教家でした。多くの著書を残しており、その中には府中の郷土史の先駆けである『府中故事』があります。今回の「府中ゆかりの人物」は、この依田伊織について紹介します。

伊織は天和元年（1681）3月に、現在の善明寺がある場所で、本町の旧家・五十嵐家の末子（9男）として生をうけました。五十嵐家の祖先采女は、府中三町のひとつである新宿の形成に功績があったとされ、新宿は古くは采女宿と呼ばれていたと伝えられています。

伊織の父は是政村（現 是政）の井田家のお孫で、五十嵐家の婿となりました。井田家の祖先は、是政村の村名の由来とされている、小田原北条氏の家臣・井田撰津守是政だといわれています。伊織の墓碑銘などには、父が是政の曾孫であると記されていますので、伊織は是政の玄孫にあたります。長じて依田と改姓するのは、これを意識してのことでしょうか、井田ではなく依田とした理由は定かではありません。依田は一般的にはヨダと読みますが、イダに近付けてエダと読んだとする説もあります。また、井田に由来することを鑑みれば、イダと読んだ可能性も考えられます。伊織は字で、通称を定右衛門、諱を貞鎮、号を徧無為といいました。

伊織は末子でしたが、兄たちの早世や出家により、五十嵐家の家事を担い、父母を養いました。転機が訪れたのは、父ののちに母を送った享保5年（1720）のことです。以前より時間があ



善明寺（本町1丁目）

れば神道・儒教・仏教を学んでいた伊織は、これを契機に府中を離れ、江戸で本格的に宗教家としての人生を歩み始めたのです。

39歳からの後半生、伊織は学問に没頭し、その成果を次々と著しました。神道・儒教・仏教の3つを兼学することにより真理が得られるとする、神儒仏一致の思想の普及に努めたのです。その功績は多くの人に認められ、延享3年（1746）には、宮門跡・輪王寺宮の命で、大阪の四天王寺に神事祭法を伝え、衣冠を拝領しています。

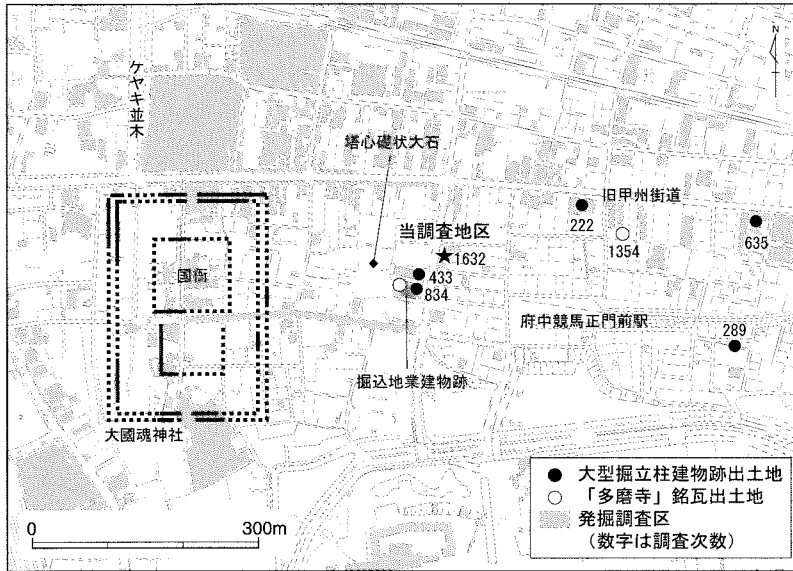
学問とともに伊織が力を注いだのが、父母の居住の地に寺院を建立することでした。当時は幕府の法令により、新寺を建立することは困難でしたので、番場神戸（現 宮西町2丁目）にあった善明寺の住職・証海からの移築の申出で、伊織は一も二もなく応じます。延享元年（1744）に寛永寺から許可を得ると、五十嵐家の屋敷地と田畑を提供して、現在の地に善明寺を改建し、念願を果たしました。

最後にもうひとつ、市内に残る伊織の足跡を紹介しましょう。大國魂神社にある東照宮の棟札には、寛保3年（1743）の再建に尽力した証として、伊織の名が記されています。この時、伊織とともに働いたのは、のちに押立村の名主から代官となった川崎平右衛門でした。

明和元年（1764）3月17日に上野谷中で没した伊織は、自らが出生の地に建立した善明寺に葬られました。人生を終え、再び府中の地に戻ってきたのです。（花木知子）

布掘り基礎の掘立柱建物跡

八幡町一丁目 府中市ふるさと文化財課 湯瀬 禎彦



今回は、武蔵国府関連遺跡の範囲に含まれる八幡町一丁目^{はちまんどちよう}で、今年4月に発見された古代の掘立柱建物跡を紹介します。発見されたのは東西に規則的に並んだ4基の柱穴です。これらは東西棟の掘立柱建物跡の一部とみられ、他の遺構との重複関係から8世紀前半ころに造られたものと考えられます。この建物跡の全体像は不明ですが、発見された柱穴には次のような特徴がありました。

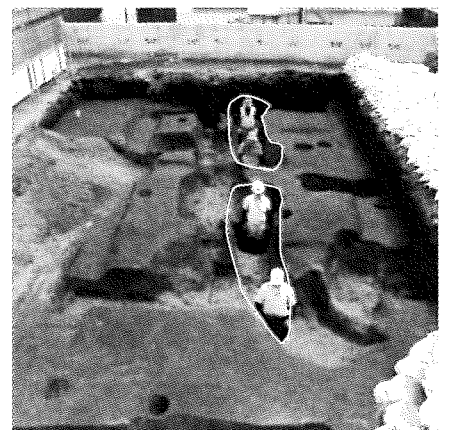
まず、4基の柱穴は東側の2基と西側の2基がそれぞれに溝状の掘込みで連結していました。こうした柱穴の形態は「布掘り」と呼ばれ、これまでに3000棟の掘立柱建物跡が見つかった武蔵国府関連遺跡でも、ほとんど確認されていないものです。

つぎに、4基の柱穴の深さはいずれも1.3mほどもあり、たいへん深く掘られていました。武蔵国府関連遺跡で、これほど深い柱穴を持つ掘立柱建物跡は、他に数例しかありません。

さらに、4基のうちの1基の柱穴のなかには、多量の白色砂質粘土が含まれていました。これは、建物が廃絶して柱を抜き取った際に混入したと考えられます。建物の白壁に使われた粘土が、建物の廃絶後に柱穴に混入した可能性が推測できます。

上記の特徴を持つ今回発見された建物跡が、どのような機能を持つ施設だったのかは、残念ながら現時点では明らかにすることができません。ただし、今回の調査地区（1632次）の南西近くでは、掘込み地業建物跡が発掘されており、その周辺では「口磨寺」と「多寺」銘の瓦が出土しているとともに、塔心礎のような大石が存在します。これらの情報などによって、ここには多磨寺と呼ばれた古代寺院が存在したと考えられています。また、今回の調査地区の東方を見ると、複数の大型掘立柱建物跡が確認されており、この地域には多磨郡家が存在した可能性も指摘されています。

このように、今回発見された掘立柱建物跡の機能を考えていくには、今後、多磨寺と多磨郡家といった、二つの異なる施設との関係を念頭に置く必要があります。



布掘り基礎の掘立柱建物跡【西から】
溝でつながった2基の柱穴が東西方向に2つ並んでいる。柱穴の深さは1.3mもある。基礎をととても堅固にした建物である。



連載

天文・宇宙の最新動向



※あるむせお イタリ語で「博物館で」「博物館にて」の意

②いよいよ動き出した次世代大型望遠鏡TMT計画

インタビュー：本間隆幸

今回はTMTについて、国立天文台TMT推進室の青木和光さんにお話を伺います。

Q.TMT計画の概要は？

TMTは、人間の目で見える可視光と少し波長の長い赤外線を観測する、口径30mのかつてない巨大な望遠鏡の計画です。建設地は



「すばる望遠鏡」のあるハワイ・マウナケア山で、日本を含む5か国の協力による計画です。

Q.ハワイのマウナケア山に建設する理由は？

標高4000m以上ある山域では、天気がよく星像がシャープで、宇宙からの赤外線を捉え易くなるからです。また、日本のすばる望遠鏡が近くにあるため、すばる望遠鏡で見つけた天体をTMTで詳しく調べることができます。これは大きなメリットになります。

Q.TMTと今ある望遠鏡と比べると？

今から10年くらい前に8~10mの望遠鏡が次々建設されました。日本のすばる望遠鏡もその1つで、それらが活躍して宇宙に対する認識が大きく変わってきました。

口径8.2mのすばる望遠鏡と比べてみると、光を集める鏡の直径が4倍、面積は13~14倍になります。大きな鏡のおかげで解像度も高くなり、望遠鏡の性能としては、例えば、東京から見て京都に置いた500円玉を見分けられるほどです。

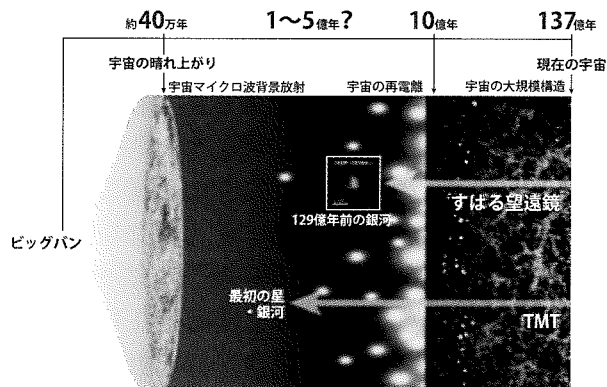
Q.どんなことを調べようとしているのですか？

大きな柱のひとつが太陽以外の恒星の惑星に関する研究です。系外惑星と言いますが、この分野はここ十数年非常に勢いで発達してきています。20年前は、太陽系以外に生命が存在するかということは、考えることはできても観測で確かめることは想定できませんでした。それが今、大まじめに検討されているのです。これまで多くの系外惑星の存在が間接的に確かめられていますが、最近はその姿が直接撮影されるようになってきました。先日も、すばる望遠鏡が

木星より少し重いぐらいの惑星の撮影に成功したことが報告されました。次の大きな目標は地球サイズの惑星の直接撮影です。TMTはそれを可能にし、さらにその惑星の大気のスペクトルをとって、大気に酸素や水蒸気があるか調べることができると考えています。すなわち生命につながる痕跡を直接捉えることができるようになるのです。

Q.ほかにはどんなことを調べますか？

宇宙の遠くを見ます。すばる望遠鏡はビッグバンから8~9億年後の銀河を検出しています。ハッブル宇宙望遠鏡による画像には、それより



も遠い銀河が写っていると言われていますが、距離が測れていません。TMTはさらに遠い天体を見つけ、詳しく性質を調べます。宇宙最初の銀河あるいは、銀河とは言えない星の集団まで見えてくるかもしれません。

Q.青木さんが一番調べたいことは？

私たちのいる天の川銀河、その近くの銀河の星たちの中から、宇宙初期に誕生した星を探し出し、その成り立ちを調べることです。遠くではなくて近くの天体から、宇宙の始めに迫って行くことができます。

Q.最後に一言お願いします。

TMTは何年もかかる計画です。多くの方に知ってもらい、応援していただければと思います。よろしくお願いします。

青木和光 Aoki Wako 国立天文台准教授

略歴：1999年東京大学大学院理学系研究科天文学専攻修了博士 同年、国立天文台COE研究員、国立天文台助手